

# 海のほとり

芥川龍之介

青空文庫



……雨はまだ降りつづけていた。僕等は午飯ひるめしをすませた後のち、敷島しきしまを何本も灰にしながら、東京の友だちの噂うわさなどした。

僕等のいるのは何もない庭へ葭簾よしずの日除ひよけを差しかけた六畳二間たまの離れただった。庭には何もないと言つても、この海辺うみべに多い弘法うぼうむぎ麦まだけは疎まばらに砂の上に穂ほを垂たれていた。その穂は僕等の来た時にはまだすっかり出揃でそろわなかった。出ているのもたいていはまっ青さおだった。が、今はいつのまにかどの穂も同じように狐きつね色いろに変わり、穂先ほのごとに滴しずくをやどしていた。

「さあ、仕事でもするかな。」

Mは長ながと寝ころんだまま、糊のりの強い宿の湯帷子ゆかたの袖そでに近きん眼鏡んきようの玉を拭ぬっていた。仕事と言うのは僕等の雑誌へ毎月何か書かなければならぬ、その創作のことを指さすのだった。

Mの次の間まへ引きとつた後のち、僕は座蒲団ざぶとんを枕まくらにしなが、里さとみ

見八犬伝みはつけんでんを読みはじめた。きのう僕の読みかけたのは信乃しの、現げ

八んぱち、小文吾こぶんごなどの莊助そうすけを救いに出かけるところだった。「そ

の時あまざきてるぶみ 蛭崎むつし 照文ふとこは懐ろより用意の沙金さきんを五いつつ包みとり出いだしつ。

先みつず三包みつみを扇あふぎにのせたるそがままに、……三犬士さんけんし、この金かねは

三十両りようをひと包みとせり。もつとも些さ少しょうの東西ものなれども、こた

びの路用たすを資たすくるのみ。わが私わたくしの餞はなむけ別わかならず、里見殿さとみどのの賜たまも

のなるに、辞いろわで納め給えと言う。「——僕はそこを読みながら、おととい届とどいた原稿料の一枚四十銭だったのを思い出した。僕等は二人ともこの七月に大学の英文科を卒業していた。従つて衣食はかりごとの計を立てることは僕等の目前に迫つていた。僕はだんだん八犬伝を忘れ、教師きょうしになることなどを考え出した。が、そのうちに眠つたと見え、いつかこう言う短い夢を見ていた。

——それは何なんでも夜更よふけらしかった。僕はとにかく雨戸あまどをしめた座敷にたつた一人横になつていた。すると誰か戸たを叩たたいて「もし、もし」と僕に声をかけた。僕はその雨戸の向うに池のあることを承知していた。しかし僕に声をかけたのは誰だか少しもわからなかつた。

「もし、もし、お願いがあるのですが、……」

雨戸の外の声はこう言った。僕はその言葉を聞いた時、「ははあ、Kのやつだな」と思った。Kと言うのは僕等よりも一年後の哲学科にいた、箸はしにも棒にもかからぬ男だった。僕は横になつたまま、かなり大おお声ごえに返事をした。

「哀あわれわつぽい声を出したつて駄だ目めだよ。また君、金かねのことだろう？」

「いいえ、金のことじゃありません。ただわたしの友だちに会わせたい女があるんですが、……」

その声はどうもKらしくなかった。のみならず誰か僕のことを心配してくれる人らしかった。僕は急にわくわくしながら、雨戸

をあげに飛び起きて行つた。實際庭は縁えん先さきからずっと広い池になつていた。けれどもそこにはKは勿論、誰も人かげは見えなかつた。

僕はしばらく月の映うつつた池の上を眺めていた。池は海かい草そうの流れているのを見ると、潮しほ入りになつてゐるらしかつた。そのうちに僕はすぐ目の前にさざ波のきらきら立っているのを見つけた。さざ波は足もとへ寄つて来るにつれ、だんだん一匹の鮎ふなになつた。鮎は水の澄んだ中に悠々と尾おひれ鰭ひれを動かしていた。

「ああ、鮎が声をかけたんだ。」

僕はこう思つて安心した。——

僕の目を覚ました時にはもう軒のき先さきの葭よし簾ずの日ひ除よけは薄日の光

を透かしていた。僕は洗面器を持って庭へ下り、裏の井戸ばたへ顔を洗いに行つた。しかし顔を洗つた後でも、今しがた見た夢の記憶は妙に僕にこびりついていた。「つまりあの夢の中の鮒は識域下の我と言うやつなんだ。」——そんな気も多少はしたのだつた。

## 二

……一時間ばかりたつた後、手拭を頭に巻きつけた僕等は海水帽に貸下駄を突っかけ、半町ほどある海へ泳ぎに行つた。道は庭先をだらだら下りると、すぐに浜へつづいていた。

「泳げるかな？」

「きようは少し寒いかも知れない。」

僕等は弘法麦こうぼうむぎの茂みを避け避け、しずく（滴をためた弘法麦の中へ

うっかり足を踏み入れると、ふくら脛はぎの痒かゆくなるのに閉口したか

ら。そんなことを話して歩いて行つた。気候は海へはいるには

涼し過ぎるのに違いなかつた。けれども僕等は上総かずさの海に、――

と言うよりもむしろ暮れかかつた夏に未練みれんを持つていたのだつた。

海には僕等の来た頃ころは勿論もちろん、きのうさえまだ七八人の男女なんによ

は浪乗りなみのなどを試みていた。しかしきようは人がげもなければ、

海水浴区域を指定する赤旗あかはたも立っていないなかつた。ただ広びろと

つづいた渚なぎさに浪の倒れているばかりだつた。葭簾よしず囲いの着もの

脱ぎ場にも、——そこには茶色の犬が一匹、細かい羽虫の群れを追いかけていた。が、それも僕等を見ると、すぐに向うへ逃げて行つてしまった。

僕は下駄だけは脱いだものの、とうてい泳ぐ気にはなれなかつた。しかしMはいつのまにか湯帷子や眼鏡を着もの脱ぎ場へ置き、海水帽の上へ頬かぶりをしながら、ぎぶぎぶ浅瀬へはいつて行つた。

「おい、はいる気かい？」

「だつてせつかく来たんじやないか？」

Mは膝ほどある水の中に幾分か腰をかがめたなり、日に焼けた笑顔をふり向けて見せた。

「君もはいれよ。」

「僕は厭だ。」

「へん、『嫣然』がいりやはいるだろう。」

「莫迦を言え。」

「嫣然」と言うのはここにいるうちに挨拶ぐらいはし合うようになつたある十五六の中学生だつた。彼は格別美少年ではなかつた。しかしどこか若木わかぎに似た水々しさを具えた少年だつた。ちようど十日ばかり以前のある午後、僕等は海から上つた体あがを熱い砂の上へ投げ出していた。そこへ彼も潮しほに濡れたなり、すたすた板いた子たごを引きずつて来た。が、ふと彼の足もとに僕等の転ころがつているのを見ると、鮮あざやかに齒を見せて一笑した。Mは彼の通り過ぎた後のち、

ちよつと僕に微笑を送り、

「あいつ、嫣然として笑つたな。」と言つた。それ以来彼は僕

等の間に「嫣然」と言う名を得ていたのだった。

「どうしてもはいらないか？」

「どうしてもはいらない。」

「イゴイストめ！」

Mは体を濡らし濡らし、ずんずん沖へ進みはじめた。僕はMには頓着せず、着物の脱ぎ場から少し離れた、小高い砂山の上へ行つた。それから貸下駄を臀の下に敷き、敷島でも一本吸おうとした。しかし僕のマッチの火は存外強い風のために容易に巻煙草に移らなかつた。

「おうい。」

Mはいつ引つ返したのか、向うの浅瀬に佇たたずんだまま、何か僕に声をかけていた。けれども生憎あいにくその声も絶え間まのない浪なみの音のためにはつきり僕の耳へはいらなかつた。

「どうしたんだ？」

僕のこう尋ねた時にはMはもう湯帷子ゆかたを引っかけ、僕の隣に腰を下ろしていた。

「何、水母くらげにやられたんだ。」

海にはこの数日来、俄にわかに水母が殖ふえたらしかつた。現に僕もおとといの朝、左の肩から上膊じょうはくへかけてずっと針の痕あとをつけられていた。

「どこを？」

「頸くびのまわりを。やられたなと思つてまわりを見ると、何匹も水の中に浮いているんだ。」

「だから僕ははいらなかつたんだ。」

「嘘うそをつけ。——だがもう海水浴もおしまいだな。」

渚なぎさはどこも見渡す限り、打ち上げられた海かい草そうのほかは白しらじら

と日の光に煙つていた。そこにはただ雲の影の時々大おお走おほしりに通るだけだった。僕等は敷島を啣くわえながら、しばらくは黙つてこう言う渚に寄せて来る浪を眺めていた。

「君は教師の口はきまつたのか？」

Mは唐いきなり突とこんなことを尋ねた。

「まだだ。君は？」

「僕か？ 僕は……」

Mの何か言いかけた時、僕等は急に笑い声やけたたましい足音に驚かされた。それは海水着に海水帽をかぶった同年輩の二人の少女だった。彼等はほとんど傍若無人に僕等の側を通り抜けるが、まっすぐに渚へ走って行った。僕等はその後姿を、  
 ——一人は真紅の海水着を着、もう一人はちようど虎のように黒と黄とだんだらの海水着を着た、軽快な後姿を見送ると、いつか言い合せたように微笑していた。

「彼女たちもまだ帰らなかつたんだな。」

Mの声は常談らしい中にも多少の感慨を託していた。

「どうだ、もう一ぺんはいつて来ちや？」

「あいつ一人ならばはいつて来るがな。何しろ『ジンゲジ』も一しよじや、……」

僕等は前の「嫣然<sup>えんぜん</sup>」のように彼等の一人に、——黒と黄との海水着を着た少女に「ジンゲジ」と言う譚名<sup>あだな</sup>をつけていた。「ジンゲジ」とは彼女の顔だち（ゲジヒト）の肉感的（ジンリツヒ）なことを意味するのだった。僕等は二人ともこの少女にどうも好意を持ち悪<sup>にく</sup>かった。もう一人の少女にも、——Mはもう一人の少女には比較的興味を感じていた。のみならず「君は『ジンゲジ』にしろよ。僕はあいつにするから」などと都合<sup>つごう</sup>の好いことを主張していた。

「そこを彼女のためにはいつて来いよ。」

「ふん、犠牲ぎせい的精神を發揮してか？——だがあいつも見られて

いることはちゃんと意識しているんだからな。」

「意識していたって好いじゃないか。」

「いや、どうも少し癩しやくだね。」

彼等は手をつないだまま、もう浅瀬へはいつていた。浪なみは彼等

の足もとへ絶えず水吹しぶきを打ち上げに來た。彼等は濡れるのを惧おそ

れるようにそのたびにきつと飛び上つた。こう言う彼等の戯たわむれは

この寂しい残暑の渚と不調和に感ずるほど花やかに見えた。それ

は實際人間よりも蝶ちようの美しさに近いものだった。僕等は風の運ん

で來る彼等の笑い声を聞きながら、しばらくまた渚から遠ざかる

彼等の姿を眺めていた。

「感心に中々勇敢だな。」

「まだ背は立っている。」

「もう——いや、まだ立っているな。」

彼等はどうに手をつなはず、別々に沖へ進んでいた。彼等の一人は、——真紅しんくの海水着を着た少女は特にずんずん進んでいた。

と思うと乳ほどの水の中に立ち、もう一人の少女を招きながら、何か甲かんだか高い声をあげた。その顔は大きい海水帽のうちに遠目とおめにも活いき活いきと笑っていた。

「水母くらげかな？」

「水母かも知れない。」

しかし彼等は前後したまま、さらに沖へ出て行くのだった。

僕等は二人の少女の姿が海水帽ばかりになったのを見、やつと砂の上の腰を起した。それから余り話もせず、（腹も減っていたのに違いなかった。）宿の方へぶらぶら帰って行った。

## 三

……日の暮も秋のように涼しかった。僕等は晩飯をすませた後、のちこの町に帰省中のHと言う友だちやNさんと言う宿の若主人ともう一度浜へ出かけて行った。それは何も四人とも一しよに散歩をするために出かけたのではなかった。HはS村の伯父おじを尋ねに、

Nさんはまた同じ村の籠屋かごやへ庭鳥にわとりを伏せる籠かごを註文ちゆうもんしにそれぞれ足を運んでいたのでした。

浜はま伝づたいにS村へ出る途みちは高い砂山の裾すそをまわり、ちようど海水浴区域とは反対の方角に向つていた。海は勿論砂山に隠れ、浪の音もかすかにしか聞えなかつた。しかし疎まばらに生はえ伸びた草は何か黒い穂ほに出ながら、絶えず潮風しおかぜにそよいでいた。

「この辺へんに生えている草は弘法麦こうぼうむぎじゃないね。——Nさん、これば何と言うの？」

僕は足もとの草をむしり、甚平じんべい一つになつたNさんに渡した。「さあ、蓼たでじゃなし、——何と言いますかね。Hさんは知つてい

るでしょう。わたしなぞとは違つて土地つ子ですから。」

僕等もNさんの東京からむこ賀に来たことは耳にしていた。のみならず家いえつき附の細君は去年の夏とかに男をこしら拵えて家出したことも耳にしていた。

「魚さかなのこともHさんはわたしよりはずっとくわ詳しいんです。」

「へええ、Hはそんなに学者かね。僕はまた知っているのは剣術ばかりかと思っていた。」

HはMにこう言われても、弓の折れの杖を引きずったまま、ただにやにや笑っていた。

「Mさん、あなたも何かやるでしょう？」

「僕？　僕はまあ泳ぎだけです。」

Nさんはバットに火をつけた後、のち去年水泳中に虎魚おこぜに刺さされた

東京の株屋の話をした。その株屋は誰が何と言つても、いや、虎こぜ魚などの刺す訣わけはない、確かにあれは海蛇うみへびだと強情を張つていたとか言うことだった。

「海蛇なんてほんとうにいるの？」

しかしその問に答えたのはたった一人ひとり海水帽をかぶつた、背の高いHだった。

「海蛇か？ 海蛇はほんとうにこの海にもいるさ。」

「今頃もか？」

「何、滅多めったにやいないんだ。」

僕等は四人とも笑い出した。そこへ向うからながらみ取りが二人ふたり、（ながらみと言うのは螺にしの一種である。）魚籃びくをぶら下さげて

歩いて来た。彼等は二人とも赤禪あかふんどしをしめた、筋骨きんこつの逞たくましい男だった。が、潮しおに濡れ光った姿はもの哀れと言うよりも見すばらしかった。Nさんは彼等とすれ違ふ時、ちよつと彼等の挨拶あいさつに答え、「風呂ふろにお出いで」と声をかけたりした。

「ああ言う商売もやり切れないな。」

僕は何か僕自身もながらみ取りになり兼ねない気がした。

「ええ、全くやり切れませんよ。何しろ沖へ泳いで行つちや、何度も海の底へ潜もぐるんですからね。」

「おまけに濡みに流おされたら、十中八九は助からないんだよ。」

Hは弓の折れの杖を振り振り、いろいろ濡の話をした。大きい濡は渚から一里半も沖へついている、——そんなことも話にまじ

っていた。

「そら、Hさん、ありやいつでしたかね、ながらみ取りの幽霊ゆうれいが出るって言ったのは？」

「去年——いや、おととしの秋だ。」

「ほんとうに出たの？」

HさんはMに答える前にもう笑い声を洩もらしていた。

「幽霊じゃなかったんです。しかし幽霊が出るって言ったのは磯いそつ臭い山のかげの卵塔場らんとうばでしたし、おまけにそのまたながらみ取りの死骸しがいは蝦えびだらけになって上あがったもんですから、誰でも始めのうちには真まに受けなかつたにしろ、気味悪がつていたことだけは確かなんです。そのうちに海軍の兵曹へいそう上あがりの男が宵のうちから

卵塔場に張りこんでいて、とうとう幽霊を見とどけたんですがね。とつつかまえて見りや何のことはない。ただそのながらみ取りと夫婦約束をしていたこの町の達磨茶屋だるまぢややの女だったんです。それでも一時は火が燃えるの人を呼ぶ声が聞えるのつて、ずいぶん大騒おさわぎをしたもんですよ。」

「じゃ別段その女は人を嚇おどかす気で来ていたんじゃないの？」

「ええ、ただ毎晩十二時前後にながらみ取りの墓の前へ来ちゃ、ぼんやり立っていただけなんです。」

Nさんの話はこう言う海辺うみべにいかにもふさわしい喜劇だった。が、誰も笑うものはなかった。のみならず皆なぜともなしに黙つて足ばかり運んでいた。

「さあこの辺へんから引つ返すかな。」

僕等はMのこう言つた時、いつのまにかもう風の落ちた、ひとけ人気が  
のない渚なぎさを歩いてゐた。あたりは広い砂の上にまだ千鳥ちどりの足跡あしあと  
さえかすかに見えるほど明るかつた。しかし海だけは見渡す限り、  
はるかに弧こを描えがいた浪打ち際に一すじの水沫みなわを残したまま、一面  
に黒ぐろと暮れかかつてゐた。

「じや失敬。」

「さようなら。」

HやNさんに別れた後のち、僕等は格別急ぎもせず、冷びえした渚  
を引き返した。渚には打ち寄せる浪の音のほかには時々澄み渡つた  
蜩ひぐらしの声も僕等の耳へ伝わつて来た。それは少くとも三町は離れた

松林に鳴いている蝸だつた。

「おい、M！」

僕はいつかMより五六歩あとに歩いてた。

「何だ？」

「僕等ももう東京へ引き上げようか？」

「うん、引き上げるのも悪くはないな。」

それからMは気軽そうにティツペラリーの口笛を吹きはじめた。

(大正十四年八月七日)



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第三卷」筑摩書房

1971（昭和46）年

初出：「中央公論」

1925（大正14）年9月

入力：j.utiya

校正：大野晋

1999年1月7日公開

2014年8月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海のほとり

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>